

Konvinka kamuflaĵo

verkita de Trevor Steele
eldonita de Flandra Esperanto-Ligo, 2014
270 paĝoj

Trevor Steeleはきわめて多作な作家である。私などには読むのさえ追い付けないようなスピードで次から次へと作品（それも大作）を発表する。しかも舞台はオーストラリアだけでなく、ヨーロッパ、ブラジル、インドなど世界各地に及んでいる。そうした彼の作品がどこまで自身の体験に根差したものなのか、これまでは読者にはよくわからなかったが、2014年にこの自伝が発表され、作品を構想するきっかけとなった体験が明らかにされた。

例えば、彼は若いころ、あるドイツの施設の長を務める。そこは、強制収容所から辛くも生き延びたものの、罪を犯して服役していた者たちを収容し、更生させることを目的とする施設であった。彼はその入所者に危うく殺されそうになったりして、散々な目に合う。Neniu ajn papilioの世界である。また、離婚後の危機のさなかに、崩壊直前で混乱の極みにあったソ連や東欧、バルト諸国に滞在し、そこで図らずも歴史の大転換の現場に立ち会うことになる。この体験は、のちにFalantaj Murojに結実する。その意味では本書はその作品理解に大いに有益である。しかし、本書は同時に、それ自体として波乱万丈の面白い読み物となっている。彼は友人から、お前はstrangulo（英語ではeccentric）だから好きだ、と言われたと書いているが、まさに、奇矯というか突飛なエピソードに満ち満ちている。

彼は60歳を過ぎるまで世界中を渡り歩き、英語、ドイツ語、エスペラントの教師、UEAの事務局長、マッサージ師など雑多な職業を経た後、オーストラリアに帰還し、また、やっとふさわしい伴侶に恵まれる。しかし、そうした長い放浪を経て、彼は自分が作家であったことを発見するのである。それまでの苦難や不幸がすべて作品に結実し、極めて多彩な文学世界が誕生することになる。その意味では本書は、現代のエスペラント界を代表する作家がその誕生を自ら語る記録となっている。

ところで、私には正直のところ、Konvinka kamuflaĵoというタイトルの意味がいまひとつ呑み込めなかった。本作品では、微に入り細をうがち、人生のディテールが語られている。例えば数多くの女性との不器用な関係、統合失調症を患う息子への悲痛な思いなどが極めて



率直、それこそ説得的に語られている。その語り口は韜晦しているようには到底見えない。しかし、いくら言葉を尽くしてディテールを書き連ねたところで、それらは結局、仮象にすぎず、真の自己には到達できないという思いが、このタイトルには込められているのだろうか。

そのことと直接に関係するかどうかはわからないが、彼は若いころ母親の影響でカトリシズムに沈潜し、神父を志した。しかし、やがてそれから離れ、一時は無神論者を自称するまでになる。ところが、ブラジルのBona Esperoに滞在中、スピリティストたちに出会い、その治療を受け、それまでの信念体系が根底から覆される体験、彼に言わせれば「人生で最も決定的な瞬間」に遭遇する。また後にオーストラリアで民間治療を受けて、自分の前世（11世紀の北フランスの死刑執行人！）を知る。そうした体験の後、彼は輪廻転生を受け入れるようになるのだが、このあたりの記述は率直なところ私には納得しがたい。ただ、彼にとっては、そこに圧倒的な体験のリアリティがあったのだろう、ということだけは少なくとも推測がつく。読むほどにいろいろなことを考えさせる本である。

（La Revuo Orienta 2016年10月号に掲載。なお、転載にあたって一部表現を改めた。）

（追記）

Trevor Steele の小説については、これまでも何回か書評で取り上げてきた。「読書日記」6に掲載したApenaŭ Papilioj en Bergen-Belsenは、2000年に根本的に書き改められてNeniu ajn papilio として発表されるが、そもそもは1994年に発表されたものである。さらに、この「読書日記2015～」でも、Kvazaŭ ĉio dependus de mi (2009) を取り上げているし、まだ掲載していないが、Dio ne havas eklezion (2015) やAmo inter ruinoj (2016) についても書評を書いたことがある。しかし、それならお前は彼の小説の愛読者なのかと問われると、ちょっと返答に詰まる。確かに彼の小説は、深刻なテーマを扱うと同時に、波乱万丈のストーリー展開や明快な文章によって読者を飽きさせないが、所詮はエンターテインメントにすぎないのではないか、という気がしてならないのである（エンターテインメントであることが悪いというわけでは全くない）。上記の最新2作品については特にそうした印象を強くする。しかし、この問題は書評の追記の範囲を超えているので、いずれまた別稿で。